えどがわの女性

vol.9
2011年
12月

「社会の役に立ちたい」
－お年寄りに寄り添って－

勝倉 洋子（かつくら ようこ）
1943年（昭和18年）
埼玉県北足立郡（現志木市）
生まれ、宇喜田町在住

100歳の大往生

「わたしはだあれ」と義妹が聞くと「洋子さん」って言うんです。洋子は嫁であるわたしの名前。おばあちゃんは娘のことも息子である主人のことも分らないのに、介護をするわたしの名前だけは覚えている。亡くなる1年前のことでした。

明治生まれのおばあちゃんが90歳で怪我をして車椅子の生活になってから、平成17年に100歳で亡くなるまで在宅介護をしました。主人には兄妹もいるのですが、わたしの介護になれているので他の人は嫌がるんです。おむつを替えたり食べさせたりは、全部わたしがやりました。おばあちゃんは、寝たきりで認知症になった最後の2年間、わたしに全幅の信頼をおいてくれたと思うんですよ。

主人が自宅で工場をやっているので、わたしにはそちらの仕事もありますし、おばあちゃんには目の不自由な妹がいてそのお世話もしていたんです。とうとうわたしの方がストレスと過労で体調を崩しまして、3ケ月間おばあちゃんを施設で預かっていただいたことがあるんですね。平成12年に介護保険ができたので、それからはデイサービスを利用して、わたしが休めるようにしてもらいました。

おばあちゃんは上からものを言う人で、ヘルパーさんにも「あなた、工場の人に挨拶はして来たの」なんて言うんです。それなのにヘルパーさんは嫌な顔ひとつしないで下の世話もしてくれて、わたしが疲れていると夜も個人的に手助けしてくれました。

おばあちゃんは意地悪をするような人ではないので、嫌だと思ったことはなかったけれど、亡くなった時には「ああ、やっと終った」という気持ちの方が強かったですね。嫁という立場から解放されたところで、船堀の支援センターでボランティアをしてみないかと誘われたんです。今までおばあちゃんがお世話になりましたから、お礼の気持ちで介護のボランティアをすることにしたんです。

おばあちゃんの介護が始まった年に実家の母が、その翌年に父が亡くなりました。両方とも最後に立ち会えなかったんです。わたしの帰りを心待ちにしてくれるのに、嫁ぎ先に遠慮して年に1度か2度帰るくらいでしたから、つらかったですね。お年寄りのお世話をしていると父と母を見るような気持ちになるんですよね。

ほめられて伸ばされて

わたしは昭和18年に埼玉県北足立郡（現志木市）の宮大工の棟梁の家に次女として生まれました。父の仕事は、建物ができあがらないとお金が入ってこないので母は苦労したようです。

母は子どものころ奉公に出て学校も満足に行けず、子守をしながら外から授業を聞くという状態だったようです。でも生活の知恵はすばらしく、明るくて世話好きで、すごく尊敬していました。煮物をお鍋いっぱい作って近所に配ったり、うちで働いている人たちに「それ持って帰りなさい」って言ったりしていました。

父は口数が少ないけれど、人望があり、思いやりのある人でした。「1年先でもいいから」って仕事を頼まれたり、お金にならなくても引き受けたりするので、子どもながらにすごいと思いましたね。高等小学校しか出ていませんけれど、父は何でも知っていて、子どもたちにもよく教えてくれました。八頭身美人で有名な伊東絹子さんの「絹」という字を、父に「読めるか」と聞かれ、「きぬ」と言いますとすごくほめてくれたのを思い出します。

小学校から高校まで、担任の先生に非常に影響を受けたんです。小学校の1年生の時「座っている足の形がじょうずに描けたわね」という先生の一言で絵が好きになり、2年生の時「この表現がすごくじょうずよ」ってほめてもらい作文も好きになりました。

3、4年生の時の先生も絵とか作文をよくほめてくださったんです。県から賞をいただくと「すごいわね、よかったわね」って喜んでくれるので、ますます作文が好きになったんですね。5年生になる時に、その先生が他の学校に転任なさると聞き、校長先生に「辞めさせないでください」って手紙を書きました。わたしは普段はおとなしいけれども、思い切って行動に移すというところがあったんですね。

高校では「お金にゆとりがあって私立に入ったわけではないので、アルバイトしたいんです」ってお話ししたら、先生は学校には内緒で仕事を紹介してくださったんです。高校2年生の進路を決める時に、その先生から「教師にお

江戸川区聞き書き研究会

聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

なりなさい。これからの女性はね、働くこと、手に職を持つことが大事よ」って言われたんですね。大学に行く資金は先生が貸してくださり、働くようになってから返せばいいと言うのです。でも、父に人様のお世話になってまで勉強しなくてもいいと反対されると、先生は「じゃあ、働きながらやってみたら」って勧めてくれたんです。父も許してくれて、昼は幼稚園で働き夜は大学で勉強し、2年後幼稚園教諭になりました。

◆手話ソングを歌う「うきた芙蓉の会」

何も知らない嫁

教諭になって2年後、練馬区の幼稚園で本当にすばらしい教育者に出会いました。園長先生の「一人ひとりの良さを伸ばす」という方針で、園児だけでなくわたしたち職員も育てられましたね。園長先生の勧めで社会教育主事の資格も取りました。これから社会のために働こうと考えていたところに、父兄の方の紹介で主人に知り合ったんです。

「出会いは作ってもらったけれど俺たちは恋愛結婚だ」って主人が言うんですけれど、お互いにピピッとくるものがあって結婚しました。嫁ぎ先は、主人が始めたプラスチック加工の工場を、家族と義兄と数人の従業員でやっていました。

主人の母親は旧家の出で気位の高い人。そのうえ、お父さん、妹さんもいて、お兄さんが一緒に仕事をしているのですから、「幼稚園しか知らないお前に、務まるわけがない」と母に言われました。恩師からも「洋子さん、苦労するわよ」と言われましたが、「大丈夫だと思います」って昭和47年に28歳で江戸川に嫁いで来たんです。

そのころ、お料理は栄養士をしていた義妹が中心になってやっていました。わたしは結婚まであまり家事をやったことがありませんでしたから、「これはどうやるの」と夢中で教わりましたね。おばあちゃんからも、カレイは目がこっちで、ヒラメはこっち、新しいお魚は薄味で、古いお魚は濃い味に煮たほうがいいのよとか、いろんなことを教わりました。

工場の経理一切はおばあちゃんが見ていました。読み書きそろばん、銀行のこと、何でもできてすごいんですよ。家計も、わたしがお金を預かって買い物に行って一部始終を報告して、おばあちゃんが家計簿につけるんです。なんか不自由だなと感じたのは3年も経ってからですね。「自分でやりくりして使いたい」って主人に伝えてもらったんです。

おじいちゃんは、わたしが嫁いで4年目に亡くなったけれど、おばあちゃんは工場の経理を続けていました。「孫の面倒をみるより、わたしは仕事が好きです」って言っていましたからね。それでも80歳を過ぎたところで、主人から「そろそろ洋子に仕事を教えてやってもらえないか」と言ってもらい、やっとわたしもやらせてもらえるようになったんです。おばあちゃんに何でも言えるようになったのは、それからだったような気がします。

楽しく介護予防

おばあちゃんを見送った後、一周忌にも出られず大変な時期がありました。介護中の疲れとストレスで体力が落ちていたのか、急性肝炎にかかり倒れてしまったんです。その後、「江戸川総合人生大学」を卒業したすばらしい方に出会い影響を受けて、わたしも平成19年に介護福祉科に入学したんです。

その年、山口県の「夢のみずうみ村」というデイサービスの施設を見学しました。「これをやりましょう」という施設主導ではなくて、利用者が今日何やりたいかを選べるんです。今日はパンを焼きたい、今日はお花の手入れをしたいとか。そうすると、元気になって介護度の軽くなる方が多いそうです。

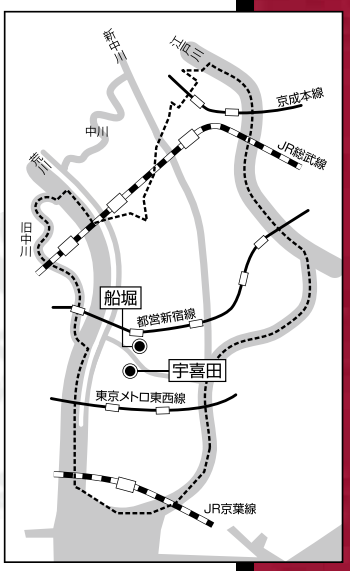
それを見て「すてきだわ、自分たちの住む街でそういう活動ができないかしら」と思ったんです。楽しく過ごしながら介護予防ができる場所を作りたいと、平成21年の卒業と同時に、同級生とボランティアでミニ版のデイサービスを提供する「うきた芙蓉の会」を立ち上げました。

月に2回、2時間ずつですけれど、牛乳パックを利用して小物入れやタンバリンを作ったり簡単なゲームや体操をしたりして、お年寄りとスタッフが一緒に過ごします。始めのころは利用者が3人ということもありましたけれど、丸2年経った今は20数人になりました。喜んでいただくのが、こんなに嬉しいとは思いませんでしたね。

平成22年の11月に「お互いさま傾聴の会」を立ち上げ、傾聴ボランティアも始めました。傾聴はその人の悩んでいることを「そうなんですね、たいへんですね」と受け止めて、考えが変われるようにお手伝いするんです。

勉強を重ねながら、病院、特別養護施設、一般家庭などにお話を聴きに行っています。「死にたい」と嘆いていたお年寄りが、「話ができて気持ちよかった」と言ってくれるようになったんです。

今はこうしてお年寄りに寄り添って、気持ちを豊かに過ごしてもらうことが生きがいです。人との出会いで活動も広がりました。主人は「元気よく好きなことをしている方が見ていても楽しいからいいよ」と言ってくれるんです。



◆ インタビュー／2011年10月
◆ 聞き手／聞き書き研究会
◆ コーディネーター／磯谷真理子　小野塚和江

◆お問い合わせ◆
江戸川区女性センター
☎5676-2455(代)